

保守派が 新鮮なリベラルに 映り始めた日本の不思議

在仏コラムニスト 安部 雅延



右派ポピュリズムが受ける訳

日本の衆議院選挙の争点の1つだった選択的夫婦別姓では、リベラル勢力は女性差別や人権問題から、夫婦が同じ姓を名乗る制度は時代遅れとして制度改革を主張した。彼らは今、国連の是正勧告も追い風となって、改正推進で勢いづいている。

一方、制度維持派が強調するのは、制度を変えれば、日本に長く続く「家」文化が崩壊すると強い懸念を表明して抵抗した。民主主義である以上、国民の過半数が改正を望めば、制度としての維持は困難で、日本文化の基層に関わる問題だけに慎重さが求められる。

リベラル派の主張の背景には、日本の古い伝統文化が不利益をもたらし、しているとして、伝統破壊の正当性を主張する人も含まれる。反権力、反伝統をイデオロギー化した勢力だが、弱小勢力でありながら改正けん引役だ。

しかしながら現在の日本だけではなく、他の多くの国での政治状況は根底から変わろうとしていることを抑えておく必要がある。それは保守・

革新の対立軸は東西冷戦終結後、大きく変わっているからだ。

興味深いのは、日本の大学で教鞭をとる数人の友人に聞くと、Z世代は保守・リベラルの対立軸を感性として理解できないことだ。例えば、リベラルの方が新鮮味があり、閉塞感のある社会を根底から変えてくれるという期待感、通用しなくなっている。むしろ、左翼イデオロギーを古臭いと考える若者が増加中だ。

逆にネット右翼に象徴される国粋主義の方が新鮮で、特に日本が自信を失い、衰退期に入っていると感じる若者にとって、ネット右翼は、1970年代、80年代に新風を巻き起こした左翼運動のように、何かを変えてくれる存在と感じているという話を聞くようになった。

深く物事を掘り下げて考える習慣のない世代にとっては、日本人としての価値や自信を与えてくれる右翼を含む保守派は新鮮に映るのかもしれない。陰謀論に走る人間が増えていくのも、アニメなどの見過ぎで世界を動かす暗闇の力を信じたい心理が働いていることも考えられる。

ヨーロッパの右傾化も、自信を

失った若者が右派のポピュリズムに走る傾向に似たものがある。あまりにも景況感のない状態が長期化し、今ではアメリカだけでなく、中国に対してコンプレックスを感じる人間がヨーロッパに増えている。

戦後、長期に渡り、左派の社会民主主義が支配的だった欧州では、高失業率、ベンチャーが育たない土壌に嫌悪感を持つ若者は多い。米中の狭間で、高邁な左翼イデオロギーに対して価値を感じない若者が増える一方、ナショナリズムを掲げる右派ポピュリズム政党はヨーロッパ人のアイデンティティ回復に期待感もある。

たとえば、フランスで2021年に、翌年の大統領選挙を睨んで登場した歴史家でジャーナリストのエリック・ゼムール氏に人気が集まったのも、支持者に若者が多いのが特徴だった。戦後の反共・保守と左派リベラルの対立構図は、フランス革命が唯一、国家の正当性を認識させる教育として浸透した。

今の20代の若者には、革命前からのフランスを読み解く論の方が新鮮に映っている。そのため、右派・国

民連合（RN）の支持率は確実に増加している。ゼムール支持も伸びている。一方で中道右派と中道左派の既存大政党を捨てたマクロン氏もたらし中道主義は、今では魅力に欠けると見られている。

選択的夫婦別姓は

伝統を破壊？

ゼムール氏はフランス革命に対して「フランスの伝統的な価値観や王政、カトリック教会に対する大きな破壊的変革をもたらした」と批判し、フランスは大革命で歴史の流れが断ち切れ、国家的衰退をもたらしたと主張している。実はフランスには、王政復古を願う王党派が1月21日の

ルイ16世処刑の日を追悼している。彼らは、フランス革命によって破壊されたと感じる社会秩序や道徳的価値を取り戻す願望を持っている。

国家のプライドを革命的に置くのか、革命前に存在した伝統的価値観に置くのかは、あまり表には出ないが重要な問題だ。マスコミが左翼知識人に覆われたフランスでは、ゼムール潰しに熱心だが、博学のゼムール氏の説得力も強力だ。

日本の選択的夫婦別姓制度に話を戻すと、反対派は現制度が改正されると、相続や税制に不具合が生じると、相続や税制と指摘するだけでなく、家長制度や家社会が崩壊するという意見が大勢を占める。中国や韓国が血縁制度なのに対し、日本の家制度は日本独自の文化に由来している。



この家社会の延長線上にコミュニティの社会道徳、集団や組織へのコミットメントが戦後の終身雇用を支えた。つまり、政府や企業の統治の目に見えない暗黙の了解事で、リーダーはマネジ

メントで、その労働規範に頼ってきた。無論、個人の自由と権利を最優先に考える西洋の価値観、国連に入り込むリベラルな思想とは対立するものだ。

しかし、私は1970年代後半、左翼運動の挫折の中に浮上した村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎の著した『文明としてのイエ社会』（1979年）や、山崎正和『柔らかな個人主義の誕生―消費社会の美学』（1984年）を思い出す。

当時はグローバルゼーションに直面する課題ではなかったが、保守派の論客は伝統と、さらなる西洋化の間で葛藤する日本がどんな目標を持つべきかを論じ、自民党政治にも大きな影響を与えた。

しかし、残念ながら、日本はバブル期に入り、企業も個人も世界中の不動産を買い漁り、今の中国の富裕層同様な拝金主義で覆われ、伝統的価値を再評価し、何を残し、何を棄てるべきかの議論は深まらず、失われた30年に突入し、終身雇用も崩壊中で、アメリカ的経営に追随している。

情けないのは左派よりも右派で、彼らにとって当たり前の保守的価値観や伝統が言語化できていないことだ。日本人の大半が家族を大切に維持しながら暮らしているのに言語化されておらず、個人の自由を優先するリベラルな主張に負けている。

はっきりしていることは、形式や形から伝統を守ることはできないということだ。伝統には魂があり、心があることで継承されるもので、その心がないのに形にこだわっているだけでは、継承はされないだろう。

心が失われた原因は、親子関係の崩壊にある。子どもは高い教育を受けるために都会に出て帰らず、親は歳を取り孤立化し、家族全員が親戚や地域社会とは疎遠になった。だからといって個がしっかりしているわけでもない。

重要なことは戦後の中間大衆層を生んだ近代化の中で失われた心とどう取り戻すかではないだろうか。そのため、互いが助け合い、共存できる濃厚な人間関係を取り戻す必要がある。地方にいても都会人が羨む豊かな暮らしができることを示す必要がある。